

# 売茶翁像の変遷

## ——江戸時代の史料における売茶翁伝の比較——

馬 叢 慧

### 目次

はじめに

1. 『近世畸人傳』と「賣茶翁傳」

2. 『落栗物語』と「賣茶翁傳」

まとめ

### はじめに

一般的に煎茶や煎茶道において「中興の祖」とされる売茶翁についての伝記は、売茶翁が89歳で亡くなる直前に、『賣茶翁偈語』（1763年）に収録、出版された大典禅師の「賣茶翁傳」が最初である。原文は800字程度の漢文であり、売茶翁の生涯とその風流を簡潔に記したものである。また、同じ江戸時代に、『近世畸人傳』（1790年）、『落栗物語』（出版年不詳）、『近世叢語』（1845年）、『高翁小傳』（1848年）などの伝記も見られる。

本稿では、江戸時代の史料に見られる売茶翁伝を比較することで、売茶翁に関する伝記の変遷を把握するとともに、江戸時代における売茶翁のイメージの形成過程を明らかにするものである。

「賣茶翁傳」は、売茶翁の法弟大潮<sup>1</sup>の弟子で、直接交友も深かった大典<sup>2</sup>によるもので、売茶翁についての記述として、極めて信憑性が高いと思われるため、本稿は「賣茶翁傳」を基本史料として、その他に作られた売茶翁の伝記と比較したい。また、『近世叢語』は、伝記と売茶翁偈語の引用で構成され、「賣茶翁傳」とほぼ重複し、『高翁小傳』は売茶翁の像や売茶翁の従兄宛の書簡が載せられたものの、伝記の内容は大典の「賣茶翁傳」の要約、『近世畸人傳』の「賣茶翁」から抜き出したものであるため、『近世畸人傳』、『落栗物語』と「賣茶翁傳」の比較に焦点をあて、江戸時代の史料における、売茶翁伝による売茶翁像の形成過程を検討する。

なお、「賣茶翁傳」については、原文は漢文であ

るが、『近世畸人傳』、『落栗物語』は和文であるため、比較しやすくするために、本稿では原文の和訳を使用する。

### 1. 『近世畸人傳』と「賣茶翁傳」

『近世畸人傳』は伴蒿蹊<sup>3</sup>により1790年に著されたものであり、様々な人物の生活像を描いた五巻からなる人物伝である。同様に伴蒿蹊による『續近世畸人傳』五巻も1798年に出版されている。森銑三氏は、自らの校註した『近世畸人傳』の冒頭の解題において、「本書に重んずべきはその文章があくまでも趣味を生命としてゐることであり、その文は特に苦心を費したといふではなく、ただ無造作に書流してゐるのに過ぎないが、然もその淡々たる叙述の内に箇々の人物を躍動せしめて居り、漢文者流の文章のやうに強いて形を整へぬ點に却つて自然の趣を得て、親しみの深いものにしてゐる。」<sup>4</sup>と評価しており、こうした特徴が江戸当時の様々な階層の人達に親しまれることとなった原因なのかもしれない。

さて、売茶翁については、畸人伝の巻二に記載されているが、発刊された当時にはすでに畸人の代表的な存在であったようで、売茶翁の伝記の他にも漢詩六首や茶具図などが含まれている。畸人伝における前半部分、龍津寺を離れるまでの記述は以下の通りである。

「賣茶翁者肥前蓮池人也。姓柴山氏、諱元昭、月海と號す。早歳薙髮龍津の化霖を師とす。化霖は黄檗獨湛禪師の弟子なるをもて、たづさへて黄檗に詣る。一日湛めして方丈にいたらしめ、賜ふに偈をもてす。少年といへども其才器異なるをしれば也。翁ますます自勉む。二十二歳におよび、痢を患て困しみ、自安ずることあたはず。ここにおいていきどほりを發し、病いまだ全愈ざるに旅だち陸奥に至り、

萬壽の月耕に附して歳をへ、またあまねく諸方の知識の門に遊ぶ。あるひは湛堂律師によりて律をもならひぬ。西に東にあとをとどめず。身たくはふる所なく、ひとへに此道をもて任とす。つくしの雷山の峰に止りて火食せず、一夏を過すがごとき、その精苦をしるべし。省悟すといへども、尚自足れりとせず。つねの言に曰、むかし世奇首座龍門の分座を辭して、是猶金針の眼を刺が如き歟、毫髪ももしたがへば晴すなはち破る、しかじ、生々學地に居て自煉んには、といへり。予つねに是をもて自警む。もし能一拳頭、あまねく物機に應ずるに足らば、いでて人のためにして可也。其あるひはいまだしからずして、そこはくの學解をかざりて、顔を抗て宗匠と稱せんは恥る所なり、と。後肥前にかへりて、師に仕ふること十四年、師没して、法弟大潮をあげて其寺の主とし、自は平安に遁る。さて曰、釋氏の世に處る、命の正邪は心なり、跡にあらず。夫袈裟の徳にほこりて人の信施をわづらはすは、われ自善する者の志にあらず、と。」

これに対して大典の「賣茶翁傳」における、同様の龍津寺時代については、以下の通りである。

「売茶翁は、肥前蓮池の人なり。姓は柴山氏、年十一に出家し、元昭と名し、月海と号す。龍津化霖を師とす。霖は黄檗獨湛を師とす。翁少にして岐嶷、稠人と比せず。嘗て師に従て黄檗に詣る。一日湛召して方丈に至らしめ、賜うに偈を以てす。蓋し其の穎異を識ればなり。翁益孳孳として自ら勉む。二十二歳に及び、痢を患い困憊し、自ら処すること能わず。是に於て奮然として遊方參詢の志あり。病未だ癒えざるに、腰包頂笠し、万里にして奥に至り、萬壽の月耕に見え、掛搭し年を経て、晨夜精励す。既にして濟洞耆碩の門を遍遊す。また湛堂律師に依て、毘尼の学を習す。或いは単孤居止し、東西を恒にせず、身に蓄うる所無く、一に斯道を以て任とす。筑の雷山、高さ二十里、翁嘗て其の頂に棲止し、麩屑を飯し水を飲み、下りて溪に浴し、以て一夏を過ごす。其の精苦類此の如し、蓋し造詣する所有りて、而して翁以て自ら足れりとせず。居恒に言うて曰く、古の者世奇首座、龍門の分座を辭す。曰く、是れ猶金針の眼を刺すがごとしや、毫髪もし差えば、晴則ち破る。生々學地に居して自ら煉らんに如かず。予

毎に此れを以て自警とす。おもえらく苟も能く一拳頭有りて、以て普く物機に應ずるに足ることあらば、出でて人の為に可とするも、其れ或いは未だ然らん。兩娑の学解を修飾し、抗顔して宗匠と稱せんは、吾が恥じる所なり。乃ち後に肥に帰り、霖に龍津において侍す。因て寺事を監するは、十有四載。霖没し法弟の大潮を挙げて之を主とし、遂に去って京にゆき、始めて其の樂託の性を肆（ほしいまま）にするを得る。又自ら謂うに釋氏の世に處するは、命の正邪の心なり、迹に非ざるなり。夫れ僧伽の徳を張夸し、人の信施を勞するは、予の自善する者の志に非ざるなり。」

この「賣茶翁傳」と崎人伝とを比較すると、崎人伝の記述はほぼ「賣茶翁傳」と類似していることがわかる。このことについては、安永拓世氏も「江戸時代中後期における煎茶趣味の展開と煎茶道の成立」において、『近世崎人傳』中の売茶翁の事績については、ほぼ『賣茶翁偈語』の「売茶翁伝」をうけたものである<sup>5</sup>と指摘するように、崎人伝の売茶翁伝は「賣茶翁傳」を読みやすくした和訳に近いものであったが、それを指摘するに留まり、具体的な両書の違いについて比較検討することはしなかった。

以下では筆者が両者の伝記について比較する際に注目した点を示したい。

第一に、売茶翁が龍津寺を大潮に託した後に、「賣茶翁伝」では「遂に去って京にゆき、始めて其の樂託の性を肆（ほしいまま）にするを得る。」とあるのに対して、『近世崎人伝』では「自は平安に遁る」とのみ表現した点である。つまり、崎人伝では「始めて其の樂託の性を肆にするを得る」が省略され「平安に遁る」と端的に記されており、売茶翁にとっての「樂託の性」は重要ではなかったかのようである。

第二に、京都で煎茶を売り始めた様子について、崎人伝では、

「ここにして始て茶をうりて飢を助く。凡春は花によしあり、秋は紅葉にをかしき所をもとめて自茶具を荷ひて至り、席をまうけて客を待。洛下風流の徒よろこびてそこにつどふ。さればいくほどなく、賣茶翁の名あまねく世に聞ゆ。」

とあるが、同じ部分について、「賣茶翁傳」では以下のように描かれている。

「乃ち始めて茶を売りて生を為す。名は通仙を以て亭とす。洛の表に占居し、それ大仏燕子の池、東福紅葉の澗、及ぶに西山糾林の佳勝、皆時に出でて之に鋪する所なり。則其の茶具を籃（かご）にし、泥爐瓦餅、注ぐに清冽の水を以てし、而して烟冉冉と擧がる。乃ち鮮芳焙煮の飲、飲む者美と称す。而るに筒中の錢、樂飢を以て足る。居る幾ばくも無く、売茶翁の名、海内に喧し。」

この部分では、『近世畸人傳』と「賣茶翁傳」で内容の明らかに異なる部分が存在している。まず、「賣茶翁傳」では、売茶翁の茶亭として有名な通仙亭を示した「名は通仙を以て亭とす」の記述が、畸人伝では省略されている。次に、売茶翁の売茶した場所についても、「賣茶翁傳」には「洛の表に占居し、それ大仏燕子の池、東福紅葉の澗、及ぶに西山糾林の佳勝」とあったが、畸人伝では「凡春は花によしあり、秋は紅葉ををかしき所」と簡略化されている。「賣茶翁傳」中に出てくる景勝地は、京都でも有名な場所であると同時に、文人層にも深い関係のある場所でもあった。畸人伝ではそのような委細は割愛して風流さのみを伝えたのである。

さらに、「賣茶翁傳」では「皆時に出でて之に鋪する所なり」、「泥爐瓦餅、注ぐに清冽の水を以てし、而して烟冉冉と擧がる。乃ち鮮芳焙煮の飲」と、茶舗を不定期で出したことや、売茶翁が煎茶を淹れる風景を描写しているが、畸人伝では、「席をまうけて客を待」と一言で言い換えてしまっている。確かに、この部分の原文の描写については、ある程度漢文の素養がある人物でないと、理解の困難な表現であるが、この文面を削除することによる、売茶翁の持つ文人的側面、文人との交友についての、イメージの変化は少なからず生じたものと思われる。

また、売茶翁の漢詩に頻繁に使われる「錢筒」<sup>6</sup>に関しては、「賣茶翁傳」に「而るに筒中の錢、樂飢を以て足る」とあるが、『近世畸人傳』においては見られない。その代わりに、「賣茶翁傳」には無い、「洛下風流の徒よるこびてそこにつどふ」という表現が畸人伝には加えられている。売茶翁にとっての売茶は、自らの理想を貫くためだけでなく、生

活の糧そのものでもあった。しかし、『近世畸人傳』の削除によって、売茶翁の人間としての生活感がほとんどなくなり、ただ悠然と風流を嗜む「畸人」だけのイメージが残されていったことは大きな転換であると言える。

そして、売茶翁が67歳で故郷佐賀に帰り、僧籍から還俗したことについては、『近世畸人伝』と「賣茶翁傳」とで、以下のようにほぼ内容が一致していることを確認することができる。

「さるに其故國の法、疆を出づるものは必官のしるしをたづさへ、十年一たび歸りて更に命ぜらるることをうく。僧といへども同じ。翁七十にのぞみて復國に還り、自僧を罷、其國人のつかへて京にあるもの下に名をよせて、十年の限りを免んとこふ。國もとより翁の爲人を信ずるゆえに、これを許す。ここにして自ら高を氏とし、遊外を號とし、笑て人にかたりていふ、吾貧して肉をもちいず、老て妻をよろこばす。葛巾野服茶を賣のすぎはひかなへり、と復京に去ぬ。」

「肥國の法、出疆する者必ず券を以てす。而るに釋氏の雲遊四方と雖も、十年必ず還り、以て更（か）える之を命ず。翁且つ七十、復た國に還るに、則ち自ら僧を罷めんと乞い、名を肥人の京に在りて宦する者に隸し、以十年の限を免るるを欲する。國固より翁の人と為りを信じずればこれを許す。是れに於いて自ら高を姓、遊外を號とす。笑いて人に語りて曰く。吾貧にして肉を以て為す無し。老にして妻を以て為す無し。葛巾野服、賣茶の生計適する有り、復た飄飄然として去りて京にゆく。」

伝記の最後の部分について『近世畸人傳』では、

「凡人茶を賣ことを奇として稱すといへども、翁の志は茶にあらずして、茶を名とす。其平居綿密の行ひはしる人まれ也。晩に岡崎に居て、携ふる所の茶具を取て火に投じ、是より門を杜ぎ客を謝して、天年を養ふ。或人いふ、一旦座右に、長咄しいや、と書付られしが、老窮ては全く客を辭せり、と。終に蓮華王院の南、幻庵にして化す。世壽八十九。寶曆十三年癸未失月十六日也。右大典禪師、翁の生前著す所の傳、偈語の後にみえたるをとりて譯して、

遷化の世壽年記等を加ふ。又偈語のうち、翁の行實にあづかる作四五をとりてここに擧。なほ翁をよろこぶ人は偈語全書をみるべし。」

と記述され、「賣茶翁傳」では、以下の通りとなっている。

「海内又遊外居士を称説せざることなし、前後贈るに詩もしくは倭歌を以てする者亡慮百數、皆翁の風流を謂う、振古未だ有らざる所なり。然れども翁の志、茶に在らずして、茶を名とする者なり。其の平居綿密の行い、人省せざるなり。晩に岡崎に居して老を養う。乃ち茶具を取りて之を焼く。其の語集中に見る。是に於いて門を杜じて客を謝し、將に身を終んとす。今茲に宝曆癸未、翁年八十九、尚恙無きことを得たりと云う。」

両伝記の最後の部分では相違点が散見される。まず、「賣茶翁傳」では「海内又遊外居士を称説せざることなし、前後贈るに詩もしくは倭歌を以てする者亡慮百數、皆翁の風流を謂う、振古未だ有らざる所なり」と、文人層との詩の交流が盛んに行われ、売茶翁の評価が高かったという記述が、崎人伝では削除されている。代わりに、「凡人茶を賣ことを奇として稱すといへども」と、崎人に関する記述が主旨であるため付け加えられたかもしれないが、売茶翁の「崎」あるいは「奇」というのは、売茶した点にあるとしている。

また、崎人伝の「或人いふ、一旦座右に、長咄しいや、と書付られしが、老窮ては全く客を辭せり、と。終に蓮華王院の南、幻庵にして化す。世壽八十九。寶曆十三年癸未失月十六日也。」については、著者の伴蒿蹊自身が当時情報を得たのであろうか、「賣茶翁傳」には無い内容が新たに追加されている。

そして、『近世崎人傳』の最後には「右大典禪師、翁の生前著す所の傳、偈語の後にみえたるをとりて譯して、遷化の世壽年記等を加ふ。又偈語のうち、翁の行實にあづかる作四五をとりてここに擧。なほ翁をよろこぶ人は偈語全書をみるべし。」と、大典の「賣茶翁傳」を和訳したこと、売茶翁が亡くなった詳しい年記を付け加えたこと、売茶翁の偈語を載せたことが明記されている。さらに、崎人伝の売茶翁伝には「蒹葭堂所蔵賣茶翁茶具圖八品」という

茶具図が付されており、安永氏によれば「この茶具を通して、次第に煎茶趣味の中での売茶翁の価値が引き上げられていったと思しい」<sup>7</sup>と評価する様に、当時はこの崎人伝の読者が大いに影響を受けたことであろうことは想像に難くない。

以上、伴蒿蹊の『近世崎人傳』と大典の「賣茶翁傳」とを比較してきたが、崎人伝が作成されたのが、寛政2年(1790年)で、売茶翁が没したのが宝暦13年(1763年)、伴蒿蹊30歳の時であった。そう考えれば、売茶翁は晩年に売茶の活動はやめていたが、同じ京都に住む伴蒿蹊には、売茶翁のもとに集った文人たちや庶民の情報が耳に入っていたことであろう。そうした点で『近世崎人傳』は、ほぼ同時期の売茶翁の様子を感じられる作品ともなっている。

また、この比較検討を経て、崎人伝では大典の「賣茶翁傳」における文人層の好むような難解な表現を排除し、端的に売茶翁の「風流」な特徴のみを伝えることで崎人として演出しようとしていることがわかる。その点では、実際に売茶翁と交友関係のあった大典による伝記と比較すると、より抽象化することで、人間としての売茶翁ではなく、やや風変わりな半神仙的な要素を持つ大衆向けの売茶翁像の形成の役割を果たしたと思われる。

## 2. 『落栗物語』と「賣茶翁傳」

『落栗物語』は、豊臣秀吉の時代から江戸後期までの200年間にわたる見聞・逸話集であり、刊本は無いものの写本は十本以上ある<sup>8</sup>。国立国会図書館蔵本の『百家随筆』に収録されたものには、作者は「垂相家孝卿」<sup>9</sup>とあり、また同館所蔵の『落栗物語』(写)にも作者は「藤原家孝」とあるので、両者は同一人物であることがわかる。この作者についても、これまで二、三の説があるようで、森銑三氏の『随筆事典5』(1961年)「解題篇」、多治比郁夫・中野三敏氏の『唐代江戸百化物 在津紀事 仮名世説』「巖垣竜溪と『落栗物語』の作者」による論文があるが、作者について未だ定説は無いとされる。

さて、売茶翁については、『落栗物語』の「三十七」に記載されている。『落栗物語』は随筆のため、「賣茶翁傳」や『近世崎人傳』のような、売茶翁の生涯に沿う書き方とは随分異なっている。まず、最



初に「雙の岡の麓に、賣茶翁と云人あり、年八十餘りて、頭は白き蓬を戴たる如し、髭長くして膝を過ぬべし」と売茶翁の外見についての描写から始まり、神仙的な要素が感じられる、やや誇張した売茶翁像を描いている。これは、伊藤若冲や田能村竹田などによる売茶翁像や売茶翁自身の作詩した「自賛三首」の二首にある「髭鬚照雪、疎髮鬢鬆」を彷彿とさせるものだと考えられる。伝記において売茶翁の外見を記述したのは、それまでの「賣茶翁傳」と『近世畸人傳』に見られないものであり、売茶翁のイメージが具体化されてきた証左とも言えよう。

次に、売茶翁の売茶風景については、「名は通仙を以て亭とす。洛の表に占居し、それ大仏燕子の池、東福紅葉の澗、及ぶに西山糾林の佳勝、皆時に出でて之に鋪する所なり。則其の茶具を籃（かご）にし、泥爐瓦餅、注ぐに清冽の水を以てし、而して烟冉冉と擧がる。乃ち鮮芳焙煮の、飲む者美と称す。」と売茶する場所、使用する茶具、茶を入れる風景を具体的に描き、『近世畸人傳』では「凡春は花によしあり、秋は紅葉にをかしき所をもとめて自茶具を荷ひて至り、席をまうけて客を待。」と煎茶道具と売茶翁の茶を入れる風景に触れていなかったのに対して、『落栗物語』においては以下のようにある。

「一の籠に點茶の具を入れ、みづから負行て、山林の面白き所、水石の清き所にて茶を點じ、人にのませつつ、貴き賤きをわかたず、料のありなきを問はず、世の中の物語なんどのどやかにしければ、皆人翁になれむつびぬ、あまた人にしられて年を経ぬれど、いかなる事有ても怒りの色をあらはせし事なかりければ、世にありがたき事にいひけり」

ここでは、畸人伝の売茶翁の描き方に加えて、「貴き賤きをわかたず、料のありなきを問はず」、「いかなる事有ても怒りの色をあらはせし事なかりければ、世にありがたき事にいひけり」と売茶翁が貴賤や尊卑にこだわらない至って公平で自由な存在であったと同時に、寛容な人間に描かれており、より一般人にも親しみやすい、ある種の神仙的な要素をもった売茶翁像を思わせる。

さらに、売茶翁の生涯についても、売茶翁本人に尋ねても「みづからはただ西國の者なり」としか答えないので、「後に肥前國蓮池殿に仕ふる侍」が売

茶翁の経歴を知っていたので話したという設定を取っている。

「此人は龍津の化霖禪師の上足の弟子なり、十一歳より家を出て、化師に従ひ論語をよみ禪を學び、二十餘りにて諸國行脚し、奥州の耕、黄檗の獨湛など云ふ名師に謁をして道のみがき、夫より西に歸りて、筑紫の雷山の奥に引籠り松の陰苔の上不起ふし、麥の粉と云物を袋に入れて持しを、少づつ食て、谷水を汲て喉を潤し、一夏の間座禪し、亦寺に歸り霖師に仕ふることとの如し、かく宗乘に於てくらからざりければ、霖師寺を譲らんといへどもうけず、師寂して後、寺を法弟大潮に譲り、己はいづくともなくうせたりしが、今はここにかくれ住るなりけり」

この内容については「賣茶翁傳」とほぼ変わらないが、敢えて他人の口から語らせるあたりに、売茶翁像の演出が感じられる。そして、「賣茶翁傳」では、売茶翁が僧侶である自らを戒める言葉として、「居恒に言うて曰く、古の者世奇首座、龍門の分座を辞した。曰く、是れ猶金針の眼を刺すがごとしや、毫髪もし差えば、晴則ち破る。生生学地に居して自ら煉らん如かず。予毎に此れを以て自警とす。おもえらく苟も能く一拳头有りて、以て普く物機に應ずるに足ることあらば、出でて人の為に可とするも、其れ或いは未だ然らん。両娑の学解を修飾し、抗顔して宗匠と称せんは、吾が恥じる所なり。」という表現を用いているが（これは『近世畸人傳』においてもほぼ同じ内容である）、『落栗物語』では「かく宗乘に於てくらからざりければ」と端的に説明されており、素養がない一般人にも背景をより理解しやすく表現した印象を受ける。

また、売茶翁が師の亡き後に龍津寺を大潮に託して寺を出てからのことも、「師寂して後、寺を法弟大潮に譲り、己はいづくともなくうせたりしが、今はここにかくれ住るなりけり」と表現しており、しばらく行方不明であったが、今は京都に隠れ住んでいると謎めいた記述をしている点も非常に興味深い。さらに、売茶翁が京都から佐賀に戻り還俗した事実や売茶翁においては象徴的な「高遊外」を名乗ったことについても、『落栗物語』においては割愛されている。

さらに「賣茶翁傳」では売茶を始めた後に還俗し

た売茶翁が再び京都に往く時に「笑て人にかたりていふ、吾貧して肉をもちいず、老て妻をよろこばす。葛巾野服茶を賣のすぎはひかなへり、と復京に去ぬ。」(崎人伝でもほぼ同意)と表現されているが、『落栗物語』においては以下のように記されている。

「我も疾くより相知れば、それが髪を伸し野服とやらん着て、僧とも俗とも見えず。いかなればかくは振舞うぞと問へば、『我は智徳共に足らず、法衣を身に纏ひ、殊勝げに見えて、人の施を受ん事、空恥づかしければ、かく俗形になれり、元より貧く、此年月茶を賣て世を渡るほどなれば、妻をも持、魚をも食べき事思ひもよらず…』」

ここでは、そもそも売茶を始めた理由を述べている点で「賣茶翁傳」「崎人伝」と大いに異なっている。なお、この売茶を始めた理由については、売茶翁の対話の記録と言われる『對客言志』<sup>10</sup>に同義の内容があることから、『落栗物語』ではそれらを踏まえて記述したものと考えられる。

また、「賣茶翁傳」で「然れども翁の志、茶に在らずして、茶を名とする者なり。其の平居綿密の行い、人省せざるなり。」(『近世崎人傳』において「翁の志は茶にあらずして、茶を名とす。其平居綿密の行ひはしる人まれ也。」とある)と記述されている文章は、『落栗物語』では見られなかった。

その他にも「賣茶翁傳」では、「海内又遊外居士を称説せざることなし、前後贈るに詩もしくは倭歌を以てする者亡慮百數、皆翁の風流を謂う、振古未だ有らざる所なり」、崎人伝では「洛下風流の徒よろこびてそこにつどふ。さればいくほどなく、賣茶翁の名あまねく世に聞ゆ。」と書かれていた売茶翁の文人との関係や文人的な才能については、『落栗物語』には一切描かれず、「皆人翁に馴れ睦びぬ」と言う、万人に好まれた売茶翁を描いている。

さらに、「売茶翁傳」では「而筒中之錢。足以樂飢」、崎人伝では、「ここにして始て茶をうりて飢を助く」とあるような、売茶翁の困窮する様、売茶を生活費に充てる様子は『落栗物語』には掲載されず、風流な崎人を描くにとどまっているのである。これは、「賣茶翁傳」は当然のこと、『近世崎人傳』よりもさらに人間としての生活要素に関する描写を一切なくし、「人間」としての売茶翁の伝記よりも、「神

仙風」の売茶翁を描いているように感じさせるものである。

最後に、「賣茶翁傳」と『近世崎人傳』の両伝記と異なり、『落栗物語』の中での売茶翁は、「浮世に心引ることなく、所定めず行巡りしかど、只都の邊は山の立ち居、水の流なつかしき所多ければ、思はずここに足留まりぬ」と言っており、売茶翁が京都にこだわったのではなく、たまたま風景が良いので滞在しているという主旨の発言をすることで、売茶翁が風流を追って浮草の様な生涯を送ったかのような体裁をとっている。この点「賣茶翁傳」等では売茶翁は京都を意識した活動をしており、その他の記録でも京都という土地に何らかの強い執着を持っていたと思われるので、『落栗物語』とは異なる状況である。

これらを考察した際に、『落栗物語』では、その他の伝記と比べて、かなりの部分が簡略化されると同時に、売茶翁の外見や行動をイメージしやすいように、端的にまとめあげている感じがある。そこには売茶翁というある種の仙人然とした風流人が描かれており、売茶翁の生涯における苦悩や苦労は削ぎ落とされている感が否めない。そのことは同時に、「賣茶翁傳」にあるような「然れども翁の志、茶に在らずして、茶を名とする者なり。」と言ったものも消し去ることとなり、単に風流なお茶を提供したに留まっているようにも思われる。その点では、この『落栗物語』をその他の二つの伝記と比べると、記された時期が下るか、あるいは実際に売茶翁を見たことはなく、諸記録にしか触れていない様にも感じられる。

## まとめ

以上、本稿では売茶翁の研究上でも強い影響力を持つ、江戸時代に著された売茶翁の伝記の内、「賣茶翁傳」、『近世崎人傳』中の「賣茶翁」、『落栗物語』中の「三十七」(賣茶翁)の三つについて比較検討を行った。

まず、「賣茶翁傳」は売茶翁が亡くなる直前に出版された『賣茶翁偈語』に付随したもので、売茶翁と直接面識のあった大典禪師により漢文で書かれたものである。売茶翁の黄檗僧時代の経歴や、龍津寺の住職を放棄し、京都で煎茶を売り始めたこと、還

俗や文人との交友、人生の終焉など、主に売茶翁の生涯に沿った内容がまとめられた伝記であった。同時に、売茶翁が京都で売茶した景勝地や売茶翁の精神、さらには文人趣味と深い関係を持つ内容が多く見られた。これらの内容や漢文での記述を考慮すると、当時の「賣茶翁傳」の読者はほとんどが教養のある文人層であったと推測でき、それらの文人層の大半が売茶翁や大典と何がしかの交流関係にあったと考えることもできよう。

次に、『近世畸人傳』の「賣茶翁」は、大典の「賣茶翁傳」を和訳した内容が多く見られる上、特に前半は「賣茶翁傳」と一致したものがほとんどである。しかし、後半においては、「賣茶翁傳」の内容に近いながらも、文人的な煎茶の風景や、売茶翁が文人と盛んに交友した内容は削除されている。また、畸人伝では、最後の部分で売茶翁の人生終焉の地についての補足や、売茶翁の漢詩（六首）と煎茶具図を付加している。これらを踏まえて「賣茶翁傳」と比較するならば、まず和文で書かれ文人との関係の部分を削除したことで、内容が容易になった為、漢文に素養のない一般人でも親しみやすくなったと思われる。そして、茶具図を添付することによって、売茶翁の煎茶に触れたことのない人々でも、イメージを伝えやすくなることができたと考えられる。その点では、「賣茶翁傳」と「畸人伝」では、情報を伝える対象そのものが異なっていたと考えることができよう。

最後に、『落栗物語』「三十七」の売茶翁についての内容は、「賣茶翁傳」と『近世畸人傳』とも異なる体裁をとっており、まず構成が「賣茶翁傳」と『近世畸人傳』とは逆で、すでに京都で売茶を始めた80歳近い売茶翁の様子から描き始めるのだが、三つの伝記の中では唯一売茶翁の外見について触れている。また、『近世畸人傳』と同様に、文人達と深い関係のある煎茶の風景の描写や売茶翁と文人との交友などの記述も見当たらない。また、売茶翁が京都から佐賀に帰り、還俗の手続きをし、再び上京した件も記述されなかった。加えて最大の違いは、売茶翁の精神や漢詩については全く触れず、風流な売茶をしたという事実のみが伝えられている。一方『落栗物語』では、売茶翁についての後半の記述で、龍津寺を離れ、京都で茶を売り始めるまで、売茶翁の行方が記されていないこと、売茶翁は京都に対し

て執着を持っていなかったような見解も示されており、これらも他の二つの伝記とは異なるものである。

このように、『近世畸人傳』、『落栗物語』における売茶翁の伝記を、売茶翁の生涯を最も忠実に記録されたとされる「賣茶翁傳」と比較することによって、江戸時代に書かれた売茶翁の伝記という同じカテゴリであっても、その差異を明確にし、読者の受ける売茶翁のイメージの変化について考察することができた。

そうして描かれた売茶翁像の変化により、読者層も「賣茶翁傳」を読んだ文人層から、『近世畸人傳』や『落栗物語』を読んだ一般層へと広まり、さらには売茶翁の煎茶についても文人的な趣味から風流な奇人としての特徴的なものとなり、やがて売茶翁は誰彼となく親しみやすい煎茶を売る老翁、さらにはより神仙風な存在へと変化していったのである。

とりわけ大典の描いた文人風の売茶翁から『近世畸人傳』と『落栗物語』に見られる半神仙的な売茶翁への変化は、何よりも売茶翁の言動や風体にそうした要素を見出したからだと思われる。しかし、売茶翁自身は決して自ら神仙をイメージして演出したのではなく、売茶翁の作品にも見られるような一貫した思想や表現が客観的に見られた際に、ある種の「神仙風」ととらえられてしまったものと思われる。

ともあれ、こうした売茶翁像の変化の変遷が、後世の売茶翁への見方、あるいは煎茶史における「中興の祖」として売茶翁が選ばれる上での根幹となるイメージとなったことは言うまでもない。

#### (注)

- 1 大潮元皓（1676-1768年）は、黄檗宗の僧であり、俗姓は浦郷、道号が大潮である。月枝・魯寮・西溟・泉石陳人とも号した。多方面の学問も修め、詩文にも優れた。『西溟餘稿』、『魯寮詩偈』、『松浦詩集』など多くの文集を残し、荻生徂徠や服部南郭など、多くの文人との交流もあった。
- 2 大典顯常（1719-1801年）は、黄檗に入り、後に相国寺の僧となった。号は梅莊、大典、東湖山人、不生主人など、顯常は諱である。儒学を宇野士新に、詩文を大潮に学んだ。
- 3 伴蒿蹊（1733-1806年）は、江戸時代後期の歌人で文章家。名を資芳、号を閑田子、閑田廬。主に『主従心得草』『閑田詠草』『閑田耕筆』『閑田次筆』などを著した。
- 4 森銑三『近世畸人傳』岩波書店 1940年 P3

- 5 安永拓世「江戸時代中後期における煎茶趣味の展開と煎茶道の成立」『商経学叢』第59巻第2号 2012年 P192
- 6 「売茶口占十二首」の「売却煎茶充飯銭」・「笑吾賣弄乞文錢」や「卜居三首」の「一條瘦杖伴孤貧」など、売茶翁の代表的な詩作によく用いられる表現である。
- 7 安永拓世「江戸時代中後期における煎茶趣味の展開と煎茶道の成立」『商経学叢』第59巻 第2号 2012年 P194
- 8 多治比郁夫・中野三敏『唐代江戸百化物 在津紀事 仮名世説』新日本古典文学大系 97 岩波書店 2000年 P427
- 9 垂相家孝卿（1747-1799年）大炊御門家孝。本姓は藤原、垂相は大納言の唐名。宝暦十二年に権大納言、天明七年に内大臣、寛政八年に右大臣となった。
- 10 『對客言志』は実際に売茶翁が書いた作品であるかは明確ではない。その墨跡は清荒神清澄寺境内にある鉄斎美術館に所蔵されており、書簡にも「賣茶翁自書、對客言志に題し、以て鍊齋老學友の爲にす」と山中信天翁（1822-1885年）の落款がある。

#### 参考文献

- 伴蒿蹊『近世畸人傳』（青山堂書房 1911年）  
 国書刊行会編「落栗物語」（『百家隨筆』第一巻 国書刊行会 1918年）  
 大典頭常「賣茶翁傳」（『賣茶翁偈語：附名公茶器銘』田中 樞治郎 1925年）  
 伴蒿蹊著、森銚三校註『近世畸人傳』（岩波書店 1940年1月）  
 伴蒿蹊著、中野三敏校註『近世畸人伝』（中央公論新社 2005年）  
 森銚三「賣茶翁」（『近世高士傳』黄河書院 1942年）  
 多治比郁夫 中野三敏『唐代江戸百化物 在津紀事 仮名世説』新日本古典文学大系 97 （岩波書店 2000年）  
 末木文美士 堀川貴司『江戸漢詩選第五巻 僧門』（岩波書店 1996年1月）  
 早川聞多「売茶翁といふ事件—『對客言志』をめぐる—」（『茶道文化大系第一巻 茶道文化論』淡交社 1999年）  
 古郡紗弥香「江戸文人の視覚文化—売茶翁を中心として—」（『研究紀要』21号 2012年）  
 安永拓世「江戸時代中後期における煎茶趣味の展開と煎茶道の成立」（『商経学叢』第59巻第2号 2012年）